

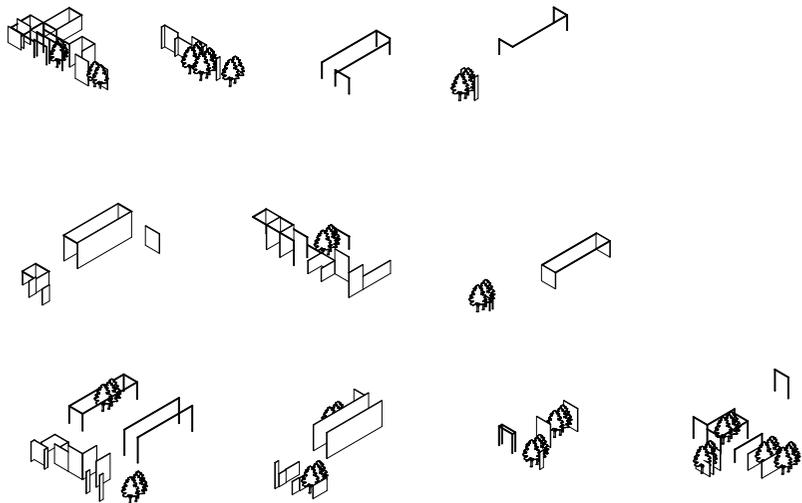
建築のセリエリズム

—外濠更新にむけて—

Concept

都市での空間体験を記述し、音楽理論を用いて建築に落としこむ手法（セリエリズム）を提案する。空間体験は一つの楽曲を聴くことに似ている。空間体験は視覚する面の比率の変化を追い、音楽は音の振動数比を追うことで認識している。都市の空間体験と建築の空間体験は音楽を介することでつなぐことができるのではないか。建築は「凍れる音楽」と表現されるように両者の密接な関係性について論じられてきた。古いものではヴィトルヴィウスの建築書の中で言及されており、本設計は音楽を介して新たな都市の風景を再構築する試みである。

ダイナミックな空間体験が展開する外濠周辺地域（飯田橋～市ヶ谷間）を対象とし、「絵になる風景」ならぬ「音楽になる風景」を見つけ、建築化・音楽化を行う。都市に散りばめられている断片的な風景を機能の持たない建築として置き換え、その間に「セリエリズム」による空間体験を挿入していく。建築体験を通じて、外濠の断片的で不連続な体験が連鎖的に紡がれていく。



Background

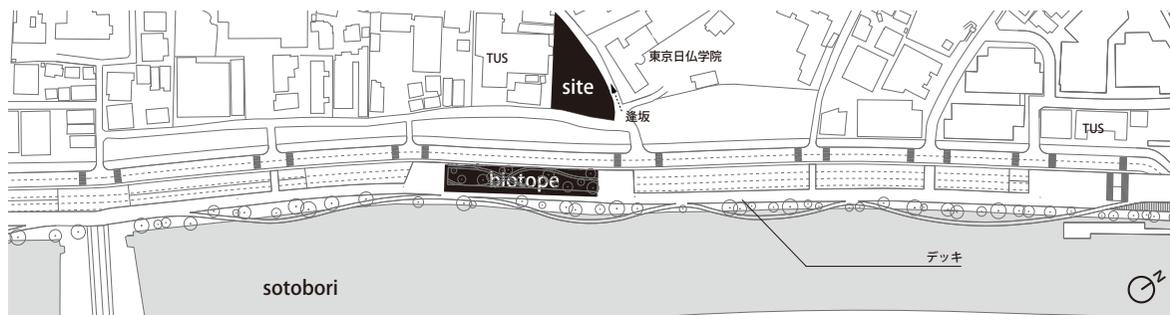
周辺の高層化や道路拡幅によって取り巻く環境が劇的に変化し、外濠が取り残され、どう継承育てるかが問われている。本設計は音楽を介して新たな都市の風景を再構築する試みである。

Site

敷地は、市谷船原町の逢坂と理科大体育館に面する場所である。敷地の北側には、逢坂を挟んで東京日仏学院があり、学生や外国人などさまざまな人々が行き交う。飯田橋駅と市ヶ谷駅のちょうど中間地点に位置しており、外濠の中間地点でもあるため、オープンスペースとして重要な役割を担っている。外堀通りは40mの計画道路幅の拡幅が予定されており、街区の立ち退きによって、対象敷地が外堀通りに面する形になり、地域住民にとっても、歩行者にとっても交流の拠点となることが期待できる。



200m



Research

都市空間のシーケンス体験を記述する。調査対象は「牛込橋」「新見附橋」「市ヶ谷橋」「外堀通り」「逢坂」「浄瑠璃坂クラック」「市谷八幡」のシーケンスについて調査を行う。



対象

移動しながら変化が感じられる地点で連続写真を撮影する。それらの写真の面を「空」「視線に垂直な立面（以下、垂直立面）」「視線に平行な立面（以下、平行立面）」「緑」「地面」をして「水面」の6種類の面に変換する。変換した写真群から面積率を求め、撮影地点に対応した変化を示す100%積み上げグラフを作成する。

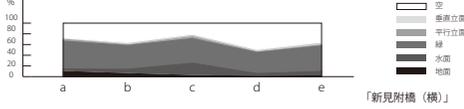
Step1. 連続写真を撮影



Step2. 表層を6種類の面に分類



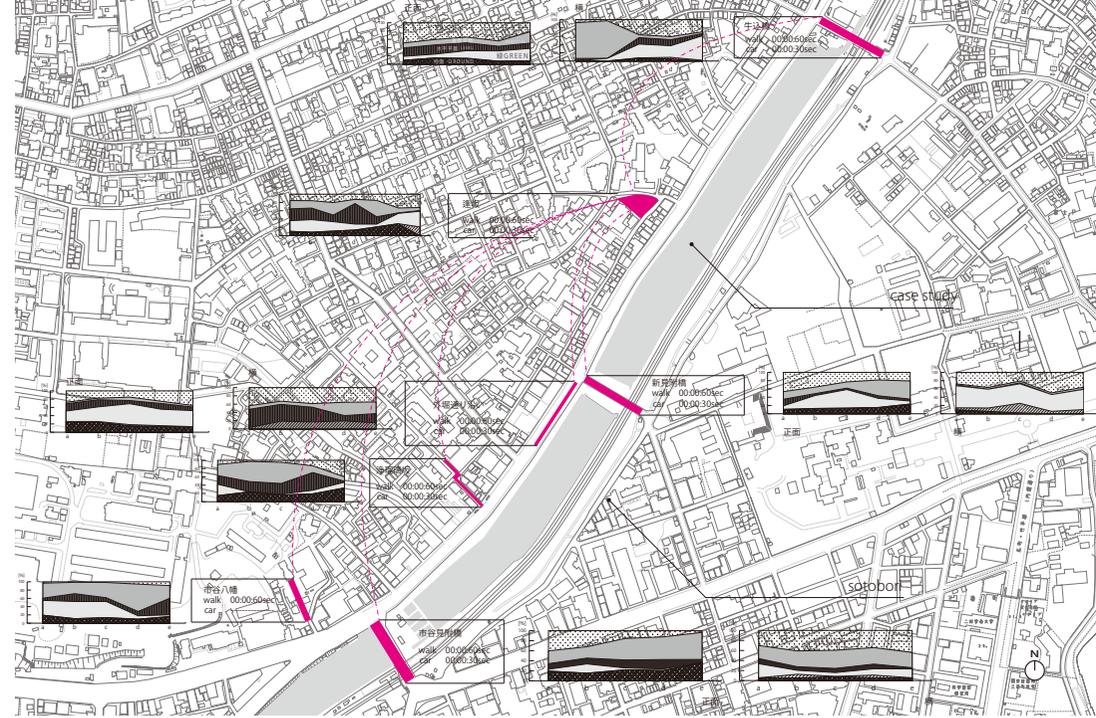
Step3. 面積比の変化を示す積み上げグラフを作成



「新見附橋（横）」

シーケンスの面積比

記述方法



調査対象のシーケンス

Methodology

音楽のセリエリズムはすべての要素をパラメーター化し、法則に従って並べる作手法である。本設計において、構成要素を分解、パラメーター化し、再構築する手法を「セリエリズム」と定義する。「セリエリズム」による都市の再構築手法を以下に示す。

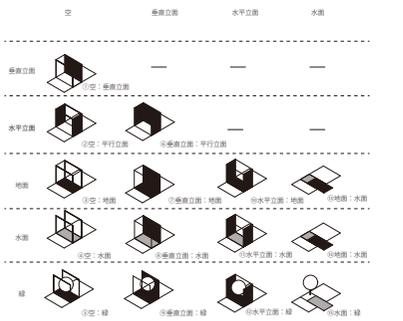
①都市の構成要素の抽象モデル化

シーケンスの記述に合わせて、「空」:「垂直立面」のように6面のうち2面の組み合わせ、全15個の都市の構成要素の抽象モデル化を行う。

②セリエリズムの作成

シーケンスの面積比に現れる音階の振動数比を抽出する。抽出された要素に合わせて、抽象モデルを当てはめていく。建築高さは振動数比によって決定される。

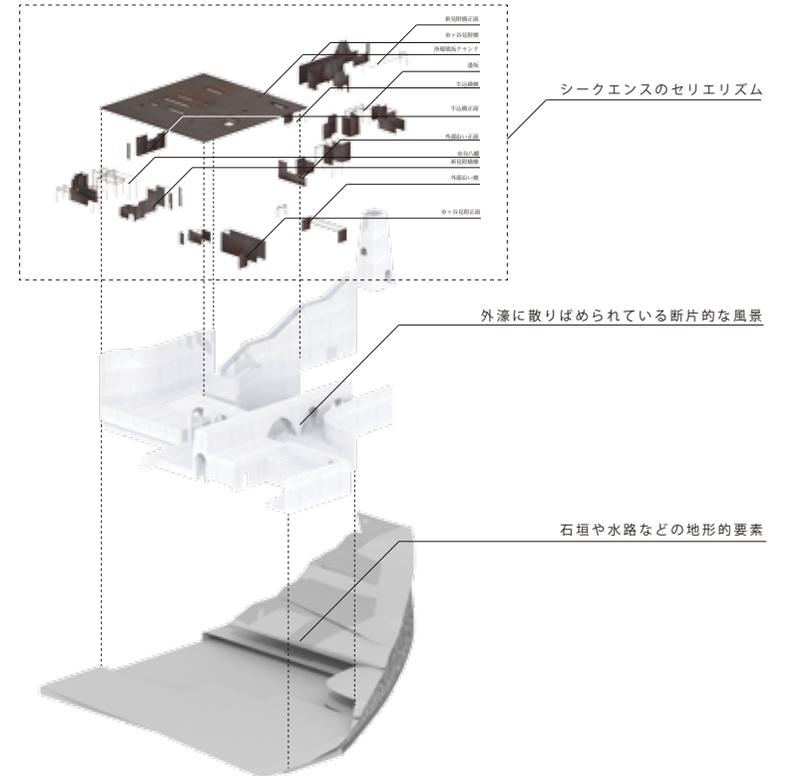
得られたモデルをシーケンスのセリエリズムと呼び、他の地点においてもモデル化を行う。セリエリズムがうみだす風景は都市と建築の境界を横断し、都市と一体的に繋がることを目的としている。



①都市の構成要素の抽象モデル化

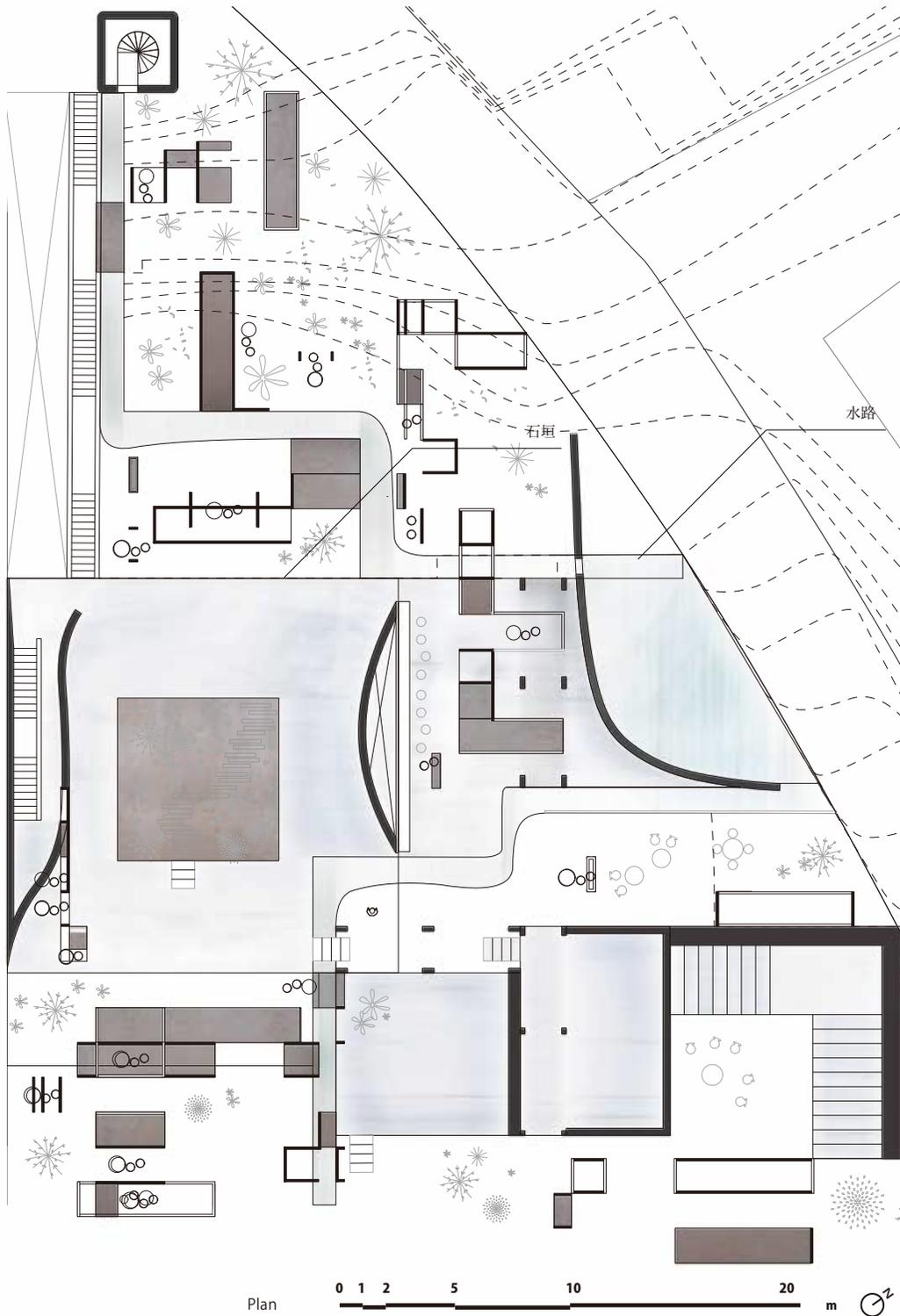


②セリエリズムの作成



外漆に散りばめられている断片的な風景

石垣や水路などの地形的要素



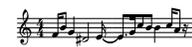
水路計画

斜面に面するこの敷地は造成された三角形の平面をしている。地面には一部石垣が残されている。雨の際に大量の水が流れこみ、敷地がフラットなために水はけが悪い状態になる。そこで、水路計画を行う。普段は、波み上げによって水が流れており、水面に近づいて水辺を楽しめるようになる。

建築の音楽化

シークエンスの面積比を音の持つ振動数比に対応させ、音楽化を行う

逢坂



牛込橋横



市谷八幡



外堀通り沿い横



牛込橋正面



新見附橋横



外堀通り沿い正面



市ヶ谷見附正面



新見附橋正面



浄瑠璃坂クランク



市ヶ谷見附横





地下広場



展望台周辺



理科大からのアクセス



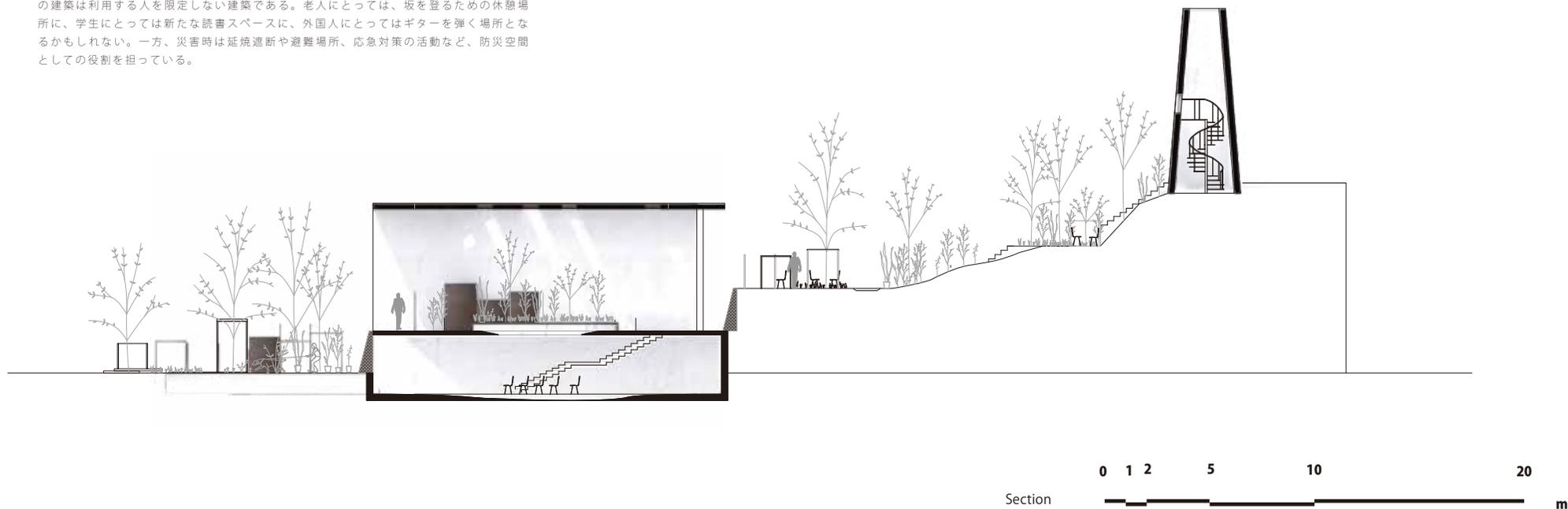
逢坂からのアクセス



外堀通りからのアクセス

プログラム

空間体験を目的とし、用途は想定しない。都市の虚としての外濠と一体的に繋がる空間である。現代音楽がセリエリズムによって調性のヒエラルキーを開放したように、この建築は利用する人を限定しない建築である。老人にとっては、坂を登るための休憩場所に、学生にとっては新たな読書スペースに、外国人にとってはギターを弾く場所となるかもしれない。一方、災害時は延焼遮断や避難場所、応急対策の活動など、防災空間としての役割を担っている。



Section

0 1 2 5 10 20 m